

厚木市史たより 第9号

平成25年7月1日

題字は渡辺華山筆「游相日記」から文字を抽出して作成したため、清音の「たより」としました。



図1 登山一号墳出土埴輪 (左 堅魚木を飾った家、右上 島田髷を結った女子、右下 鶏)

はじめに

登山一号墳の埴輪については、この『市史たより』の創刊号で簡単に紹介しましたが、今回はもう少し詳しく紹介したいと思います。

登山古墳群は、小鮎川と恩曾川に挟まれた尼寺原台地の北縁、東京工芸大学の東側の崖上に位置します。五基の古墳が知られており、市内で唯一の埴輪を出土した一号墳はほぼ消滅しましたが、残りの四基は「登山古墳史跡公園」として整備されています。昭和四十二年(一九六七)に厚木市教育委員会が行った一号墳の発掘調査では、男子・女子・馬・鶏・家などの形象埴輪のほか、円筒埴輪が多数出土しました。

男子の埴輪には、全形のわかる、胃をかぶった男子、力士のほか、帽子をかぶった男子などがあります。女子の埴輪は部分的にしか残っておらず、全体がわかるものはありませんが、一般的な女子の造形のように、変わった姿のものはないようです。家は完形に復元された一個のみです。馬は破片しか残っていませんが、一般的な飾り馬のようです。馬を飾り立てることは、当時、権威の象徴でした。鳥も破片しかありませんが、鶏と水鳥と考えられています。円筒埴輪は、単純な筒形の普通円筒埴輪と、口縁部が広がる朝顔形円筒埴輪が

登山一号墳出土の埴輪群をめぐって

市史編集委員会原始古代編集部 望月幹夫

あります。百個以上の円筒埴輪が墳丘を囲んでいたと考えられています。

形象埴輪は壊れて一部しか残っていないものがほとんどですが、全体の形のわかるものが三個あります。胃をかぶった男子、坊主頭の力士、堅魚木を飾った家です。これら三個の埴輪は、昭和四十七年（一九七二）六月に市の指定文化財となり、市役所のホールに飾られることになりました。その後、一号墳から出土した埴輪群の重要性が認められ、平成四年（一九九二）二月に一括して県の指定文化財に登録されました。また、平成二十四年（二〇一二）二月には、登録からもれていた個人蔵の埴輪などが、県の指定文化財に追加登録されています。

貴重な埴輪

さて、全形が復元され、市の指定文化財となった三個の埴輪は、県の指定文化財に登録される際に修理が行われました。その結果、三個とも、その姿が変わることになりました。

胃をかぶった男子（図2） 胃をかぶった男子は、当初は、右腕に鷹をとまらせた「鷹匠」と考えられていました。しかしながら、その後、



図2 胃をかぶった男子

鷹匠が胃をかぶっているのはおかしい、鷹匠は鷹を左腕にとまらせるのが普通であり、右腕にとまらせるのはおかしい、鷹が人物に比べて大きすぎる、鷹は右腕に接合していないのではないか、といった疑問が出されました。

そこで、修理の際にいろいろ検討した結果、鷹が右腕に付いていた確証が無い、鷹とされているが、くちばしも欠けていて鷹であるかわからないなどから、鷹とされていた鳥はずすことになりました。ただ、右腕には何かが付いていた痕跡があり、今は失われてしまった鷹が付いていた可能性も残っています。鷹でなかったら何が付いていたのかということになるのですが、まだ結論は出ていません。この男子は、胃の表現ははっきりとしているのですが、胴に甲の表現はみられません。脚にも防具の表現は無く、鈴をつけた脚結の表現があります。腰に大刀を帯びているのは盛装した男子にもみられますので、「武装」の証拠にはなりません。「武装した」とするにはちょっと中途半端な表現になっています。胃はしっかり作っているのに甲は省略したのでしょうか？埴輪の製作工人がちょっと手抜きをしてしまったのでしょうか？

ここでどうしても気になるのは、右腕に何かが付いていたのかということです。実は、いろいろな例から考えると、鷹がとまっていたとするのもっとも自然なものです。盛装した男子、武装した男子にくらべると、鷹匠の埴



図3 坊主頭の力士

輪ははるかに数が少ないので、埴輪の製作工人が、「鷹匠」をどのように作ったらいいかわからないで作ってしまった、という可能性も考えられます。「武装した男子」だったのか、「鷹匠」だったのか、結論は将来にもちこされています。

坊主頭の力士（図3） 当初、坊主頭の男子は、髪の毛の表現が無いことから僧侶と考えられ、「行脚僧」とされていました。しかし、解体修理の結果、胴はずっと短かったことがわかりました。また、股間にも帯状のものが貼り付けてあった痕跡が見つかり、腰の帯と一体になるまわしを締めていたと考えられるので力士とわかりました。全国的にも数の少ない珍しい埴輪です。他の例でみると、力士の髪型は普通の男子とはまったく異なり、頭頂部に横向きの扁平な扇形のまげで表わす例が多いようです。現代の力士のまげとも異なっています。坊主頭の力士は非常に珍しいといえます。両足の甲には五個ずつ突起がついていますが、これが何であるかわかりません。同じような表現の足をもつ埴輪が、川崎市末長久保台遺跡で出土していますが、足だけで

すので、どんな人物なのかわからないのが残念です。ただ、坊主頭の破片が出土していて、登山例と同様の力士であった可能性も考えられます。力士の埴輪で、このような足を表現したものにはありません。イヤリングを表現しているというのかわっています。登山の力士埴輪は、力士としては非常に珍しい例だということがいえます。

堅魚木を飾った家 (図1・4) 家は寄棟造りで、棟に堅魚木を飾っているのですが、位の高い人の住む家を表していることがわかります。実はこの家も修理で形が変わりました。当初の復元では、扉は入口に向かって左に、外開きでつけられていました。ところが解体したところ、入口左側には扉が接合していた痕跡がまったくわかりませんでした。扉の方には剥離痕があるので、入口に接合していたはずだということである。いろいろ検討した結果、入口に向かって右側に、内側に開くように接



図4 堅魚木を飾った家の入口と扉

合していたことがわかりました。埴輪で住居や倉庫を作る場合には、壁に方形に穴を開けて入口や窓を表わすのが普通です。しかしながら、扉まで付属している家の埴輪は数が少ない上に、内側に開くように表した例は稀で、貴重です。この家は、被葬者が生前に暮らしていた家を象ったものかもしれません。

古墳と災害

以上のように、登山一号墳の埴輪には、全国的にも貴重な埴輪が含まれていることがわかりただけのことと思います。

さて、発掘調査ではたくさんさんの埴輪が周溝から出土しました (図5)。

図6をご覧ください。ちよつとわかりにくいかも知れませんが、古墳をとりまく周溝には火山灰が厚く堆積しており、埴輪が横倒しになって埋まっていました。つまり、溝の底に倒れこんでいたのではなく、溝の中に火山灰がかなり堆積した後に倒れこんでいたことがわかります。「厚木市登山古墳調査概報」(『厚木市文化財調査報告書』第八集一九六七年)によれば、南側の周溝の断面中央で観察すると、底から5cmが極めて細かい褐色土、その上18cmは粗粒黒褐色火山灰、その上7cmは細かい黄褐色火山灰、その上17cmは粗粒黒褐色火山灰、その上21cmは粗粒帯黄色黒褐色火山灰、その上45cmは褐色粗粒火山灰、その上35cmはやや細かい黒褐色火山灰が堆積していました。埴輪が埋没していたのは、上から二番目の褐

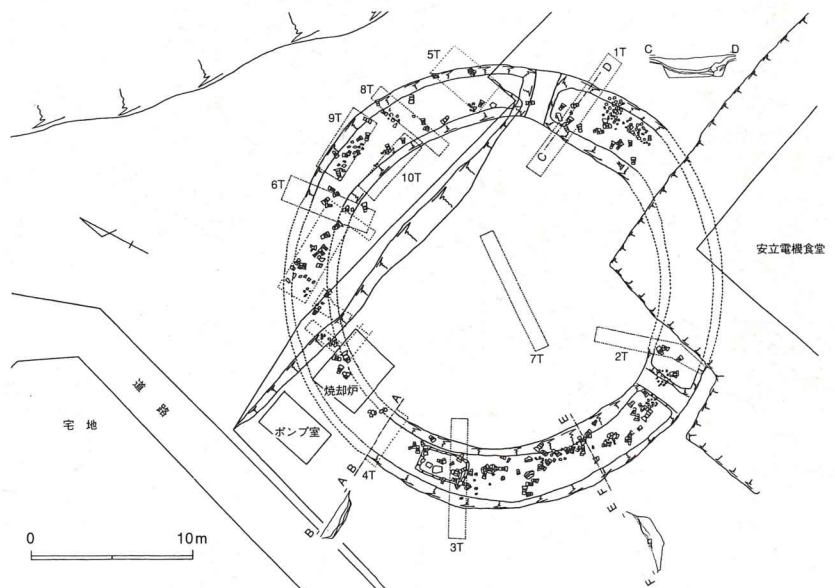


図5 登山一号墳埴輪出土状況

色粗粒火山灰の中ということ。六つの火山灰層が観察されていますが、これらの火山灰が一回の噴火で堆積したのかどうかはわかりません。最大に見積もれば六回の噴火があったということになるのでしょうか。つまり、古墳が造られてからしばらくして火山の噴火が起こり、火山灰が60cmほど堆積した段階で、火山灰が一気に45cmも堆積するような大きな噴火があり、その時の大地震で埴輪が転落し、さらにその後の噴火による火山灰で埴輪は完全に埋もれてしまったということになるので



図6 周溝内埴輪出土状況

しょう。

これらの噴火がいつ起こったのか、正確な年代はわかっていません。埴輪の製作年代は、六世紀前半頃と考えられていますので、もちろん、噴火はそれ以降ということになります。ではいつかといわれると答えに窮するのが現状です。火山灰の科学的分析から年代が解明される日が早く来ることを願うばかりです。

ところで、周溝に堆積した火山灰を掘り出して、古墳を元通りに復旧しようとする努力はなされなかったようです。なぜ元通りに修復されなかったのでしょうか？お墓を管理する人たちはいなかったのでしょうか？

もちろん、火山灰は登山一号墳の上にだけ

降り注いだわけではなく、周辺の広い地域にわたって降り積もったと思われます。住居や農地などの被害も大きかったと想像されますから、生きることが優先されて、墓地の復旧をあきらめざるをえないような状況だったのかもしれない。

逆に、登山一号墳の埴輪は、火山灰の中に埋もれたからこそ、現代までいい状態で残っていたともいえます。もし、噴火や大地震もなく、古墳に立ち続けていたら、長い間に壊れたり風化したりして、破片しか残らなかったかもしれない。火山の噴火は人々の生活に大きな被害をもたらしますが、イタリアのポンペイ遺跡の例もあり、タイムカプセルの役割を果たすこともあります。日本でも、最近、群馬県渋川市の金井東裏遺跡で、六世紀初頭の榛名山二ツ岳の噴火で火砕流に巻き込まれて犠牲になった、甲を着けた成人男性や、首飾りをつけた成人女性の骨が見つかった話題になりました。

東海地震や富士山の噴火が心配される昨今、過去の被害を調べて将来の予知に役立てようとする試みが盛んになってきています。登山一号墳の埴輪も、過去の噴火や地震の解明に役立てることができるかもしれません。

(掲載写真・図は『登山一号墳出土遺物調査報告書』、『厚木市登山一号墳出土埴輪修理報告書』より転載しました。)

既刊厚木市史一覧

書名	価格(円)
厚木市史 地形地質編・原始編	6,000
厚木市史 古代資料編(1)	5,700
厚木市史 古代資料編(2)	7,140
厚木市史 中世資料編	5,700
厚木市史 中世通史編	6,130
厚木市史 近世資料編(1) 社寺	5,600
厚木市史 近世資料編(2) 村落 1	5,700
厚木市史 近世資料編(3) 文化文芸	2,490
厚木市史 近世資料編(4) 村落 2	3,570
厚木市史 近世資料編(5) 村落 3・荻野山中藩	2,690
厚木市史 近世資料編(6) 村むらと生活	6,710

*厚木市役所市政情報コーナー・郷土資料館にて発売中

編集後記

市史編さん事業では、現在まで11冊の『厚木市史』を刊行しており、現在12冊目の民俗編(1)生活記録集の編さん作業を行っています。次号の「市史たより」は、10月に発行予定です。来年3月発行の民俗編(1)生活記録集の内容を紹介したいと思います。

厚木市史たより 第9号

平成25年7月1日発行

編集 厚木市教育委員会文化財保護課

発行 厚木市

住所 神奈川県厚木市中町3-17-17

電話 〇四六-二二五-二〇六〇

FAX 〇四六-二二三-〇〇八六

『厚木市史たより』は厚木市ホームページにも掲載しております。